

今日は、神様の愛を教える、有名なお話が福音書に選ばれているので、その話をしたいと思います。  
キリスト教の教えは、旧約のモーセの十戒を、イエス様が律法の専門家に質問して答えさせた、次の言葉で要約できます。

『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』（ルカ 10：27）

全身全霊で神様を愛することと、隣人を愛することですね。

この大切なことを私たちが学ぶために、イエス様は有名なふたつのお話をしてくださいました。  
ひとつが、今日の放蕩息子のたとえであり、もうひとつが、善いサマリア人の話です。善いサマリア人の話が、隣人愛の話であることは皆さんよくご存知でしょう。ひとりのユダヤ人が、追いはぎに襲われて、半殺しの状態で倒れていました。それをユダヤの立派な宗教的指導者たちである、祭司やレビ人は、見てみぬフリをして通り過ぎましたが、日ごろ仲の悪いサマリア人が、自分の予定を変更して、倒れていたユダヤ人を隣人として支えて親切にしてやったという話でした。これは婦人之友にも書きました。

一方、放蕩息子の話は、父なる神様の愛を語ったものです。「放蕩息子のたとえ」という名称とは違って、この話の主人公は、自分の子どもに遺産を分けてやり、自由を与えて、それでも、ずっと心配しながら待っている、ダメな父親です。それぐらい、神様は私たちに自由を与えて、私たちが神様のものに帰ってくるのをずっと待っている、やさしい父親のような方だということです。この私たちが愛して下さっている神様の豊かな愛を感謝し、それに応える愛を聖書は勧めています。神様からの愛が先です。

私たちが主の祈りを唱える時、「天におられるわたしたちの父よ」と呼びかけますが、神様がどんな方であるか、改めて、この放蕩息子のたとえを見てゆくことにしましょう。

ある人にふたりの息子がいて、弟の方が父に「お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください」と申し出ます。これは、息子としては、当時とてもまともな申し出ではありませんでした。イエス様の時代、このような財産を要求するのは、父親が生きている間には、ありえないことだったようです。この要求は「お父さん、あなたが死ぬのを待ってられません。」と言っているようなものだからです。普通だったら、「この親不孝者め。私が死ぬのも待てないのか。文句を言わずに、じっと働きなさい。」と叱られるようなことです。

ところが、不思議なことに、この父親は、息子の無茶な要求を呑んで、言われるままに分けてやるのです。受け取った息子は、その財産を金に換えて、遠い国へ行き、それを使い尽くしてしまいました。そしてその地方に飢饉が起り、食べるのにも困って、その息子は豚の世話をします。私たちは、この仕事について特に何も思いませんが、ユダヤ人は豚肉を食べません。豚のヒヅメは分かれているのですが、食べ物を反芻しないので、豚は食べてはいけない動物のリストに入っています。ユダヤ人の嫌う動物であり、その世話をするというのは、ユダヤ人にとっては、屈辱的なことだったのでしょう。

その時、彼は初めて自分が愚かな行動をしていたことに気づきました。父の家では、雇い人だって有り余るほどのパンがあるのに、自分はそこを離れてしまって、今は誰も食べるものをくれないのです。

父には、とても息子として顔向けできないけど、父の家を離れては、自分は生きてゆけないことに、この息子は気づいたのです。そして、もう息子と呼ばれる資格はないが、雇い人のひとりでもいいから、あの家に帰って暮らすことにしよう、と決断しました。

そして、トボトボと歩いて帰っていると、『まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。』というのです。

この文章の中に『憐れに思い』という表現が出てきましたが、実はこれが愛情を示す言葉なんです。

隣人愛を教える話として、善いサマリア人の話があると言いましたが、倒れている人を見たサマリア人のことを書いている箇所にもこんな表現が出てきます。

(ルカ 10 : 33 ~ 34)

『33:ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに來ると、その人を見て憐れに思い、34:近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。』

この『憐れに思う』という言葉は、もとの言葉では、自分のお腹が痛い、自分の内臓が痛む、という意味です。心が揺さぶられると言うより、自分の体が揺さぶられるような、ほっておけない感情を表す言葉です。

これと、大変よく似た表現が、沖縄の方言にあります。「チムぐりしゃ」という言葉です。沖縄には可哀想という方言がなくて、それを言いたい時「あいえな～肝苦しゃよ～」と言うのだそうです。相手の痛みを自分の痛みとして捉えて、自分の心、胸が痛い、という表現です。

「チムぐりしゃ」を漢字であてはめると、「チム」は「肝」肝臓のことですね。「肝臓が苦しいよ」ということです。どうでしょうか、放蕩息子のたとえや、善いサマリア人の話に当てはめて、想像してみてください。

長い間、家を離れて放浪していた息子を、ずっと『今日は帰るか、明日は帰るか、』と案じながら待っていた父親は、きっとひもじい思いの息子の痛みが、遠くでも感じられたのではないのでしょうか。

また、サマリア人は、道で倒れて、半殺しの状態になっているユダヤ人を見て、その人の痛みが自分のことのように分かったのでしょうか。どうして、そんなに痛みを感じることができたのか。私は、このサマリア人が、普段ユダヤ人たちが大勢いる中で生活し、人々から差別されながらも、そこで生きてゆくしかなかった、辛さ、痛みがあったので、違った傷の痛みでも、感じ取れたのだらうと思います。

キリスト教の愛というのは、他の人の痛みに共感する、そんなところがあって、その模範が、あの十字架の上で、人々のために苦しんだイエス様の苦しみから派生したものだ、ということです。

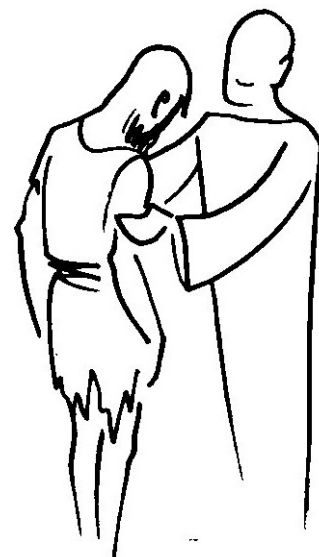
そんな人の痛みがわかる神様の愛、人の痛みを感じられるイエス様の愛に、応えてゆこう。欠点だらけの人間を受け入れてくださる神様の愛を感じながら、感謝して歩める生き方。それが、聖書の最も重要な掟、教えであることを忘れないで歩みたいのです。

以前、宮崎市内の牧師会があった時、説教をしてくださった牧師さんは、自分が過去に仕事上で失敗し、うつ病になったことがある。そのつらい体験が、自分を成長させてくれたように思う。人間は成功ではあまり学ぶことはないが、失敗とか苦しい経験が、私たちを成長させるのではないか、という話をされました。

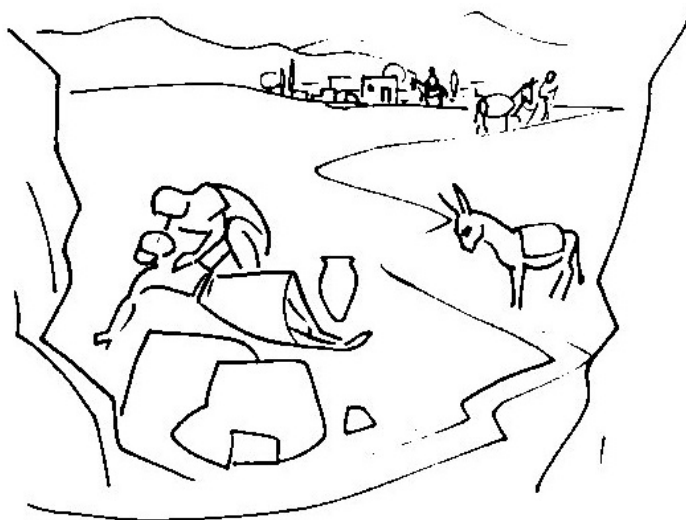
私たちが、普段経験したくないと思っていること。でも実はそれが私たちにとって貴重で大切なことであるということ。イエス様が十字架の上で負わされた痛み、苦しみに通じることであり、究極の愛である。そしてそれを通して愛が広がる、ということを信じていきたいと思います。



*Here I am about to starve! (15.17)*



*But now he is alive (15.32)*



*His heart was filled with pity (10.33)*